■　■　■

□雜誌の編輯は六づかしいもので、種々の嗜好を有する數千の讀者に、多少の滿足を與えねばならぬ。

□如何にして讀者の喝采を得べきか、如何にせば雜誌の賣高を增すべきかと、世の當業者は一方ならぬ苦心で、中には誇大の廣告をしたり、改良と號して體裁を改めたり定價を下げたり、それは〳〵出來得る限りの手段を盡して讀者を得んとしてゐる。

□されば夫等の雜誌は、各方面の大家の名を以て目次を飾り、內容も趣味饒に、紙數も多く、其價も廉に、充分讀者を滿足せしめ得べき實のものである。

□『みづゑ』は如何。每號僅に二三家の名を列するのみ、片々たる小册子、しかも其編輯の仕方の我儘至極なる、他の雜誌と比較する時は、吾ながら赧然たらざるを得ない。

□天にも不拘日に月に讀者の數は幾分か增してゆく、何故であらうか。

□『みづゑ』は營利を目的としない、(第六と第七は少々足し前の覺悟)名聞も構はない唯々僅かなりとも水彩畫の普及を促し、且其趣味を有する人々と樂を共にすればよい。要するに水彩畫を好む人々の友であるといふ點が、諸君の同情を得て、多少の不滿はありとも、猶且此雜誌を愛せらるるのではあるまいか。

□現今の『みづゑ』そのものはまだ〳〵編者の理想に遠い。又讀者の同情に甘へて、此儘でいつ迄もやつてゆくのではない。たゞ今の處では、銘々非常に忙しい中を執筆し整理して、每月辛じて出すやうな譯であるから、思ふとは多くとも手が廻らぬ、經濟が續かぬ、夫が爲めに積極的の仕事がやれぬからである、隨て月によつてよい雜誌の出來るともあり、又一向詰らぬものが產れる時もある。

□併しいつ迄もかうでもあるまい、そのうちには諸君に充分の滿足を與へるとの出來る機會も來るであらう、希くは心永く愛讀されたい。

□返す〳〵も讀者諸君の深き同情と厚き愛顧を社中一同謹て感謝する。

○本號は赤城の記事にて紙面を塞ぎ、所謂同行三人の雜誌と相成、眞に申譯無之候。其代り次號には有益なる記事澤山出づべく候。

○丸山氏の『日本と水彩畫』といへる大氣焰石井氏の『我が水繪』の續稿、眞野氏の寫生用遠近法、榕村主人の『色彩應用論天空の描法』等次號の重なる記事に候。

○挿入の彩畫は、水彩畫の粲及階梯にて御馴染の Powel 氏の海の圖、丸山氏の風景及お年玉として他に一枚の精巧石版刷を出す筈に候。

○鉛筆畫の步は近き號より出すべく候。肯像畫法は相談中なるが、多分登載するとに可相成候。

○同好畫會の催にかゝるスケッチ、エハがキ展覽會に對する本會主任の所見は、記事の都合合にて次號に相廻し申候。

○讀者よりの質問は。即答を要せざるゝ爲め、是迄本誌に掲載せざりしが、一般に利益あるものは爾來公に致すべく候。

○御寄稿は隨分澤山集まり候に付來年三月頃臨時增刊を出すべく候間益々奮て御投書下され度候。猶繪畫は其內新に募集可致候。

○會員組織の事について御書面給りし諸君へ御禮申上候。少數にても思想の固き人々と結合致度希望につき、御意見ある方は何卒御洩し下され度候。

近事雜聞

△上野五號館に開かれしスケッチ、エハがキ展覽會は、東京神奈川各學校生徒及素人團體の製作を集めしもので、校小千枚に近く、中には專門家も凌ぐ程の逸品少なからず、成績も良好なる由にて、猶來年も引續き開會すべしといふ。

△谷中眞島町に新築され太平洋畫會研究所は、去月六日より授業を始めたり。此程上京町には、新に水彩畫科を設け、此程上京されては、丸山健策氏主として教授さるべく、本會の大下氏も一週一回出席して其業を補けらるゝ筈なり。

△猶神田附近に支部を設け、每週日、土兩日、專ら素人畫家の爲めに短期修業の道を興ふべく、科目は墨畫、水彩畫、遠近法、色彩の理論其他にして、明年一月頃開校の運びに至るべしといふ。